「農場のDXを探る」テーマに現地研修会

N.G.C.の取り組み学ぶ

全鶏会議青年部が本社と美作農場で

全国養鶏経営者会議（略称・全鶏会議）の青年部（永井隆寛部会長）は7月26、27の両日、「農場のDX（デジタルトランスフォーメーション）を探る」をテーマに現地研修会を開き、採卵鶏の育すう・育成事業を展開する㈱N.G.C.（鈴木康太郎社長）の本社と美作農場を訪問した。

近年は農業分野でもDXが推進される中、全鶏会議副会長も務める鈴木社長は、IT企業と連携し、「DXに関しては素人」と謙遜した鈴木社長に謝意を表し、「DXに関してはまだ勉強不足であるため、今回の研修で学んだことをそれぞれ持ち帰り、自分たちの経営に生かしてほしい」とあいさつした。

鈴木社長は、①農場のDX化活動に至った経緯②DX化への取り組みの今後の課題――などを説明した。

JR岡山駅西口に集合した約30人の参加者一行は、バスでN.G.C.の新しい本社屋（兵庫県上郡町、6月26日から業務開始）に向かい、鈴木社長らからDX化に関するプレゼンテーションを受けた。

冒頭、永井部会長（㈱ナガイタマゴ）は現地研修会の開催に全面的に協力した鈴木社長に謝意を表し、「DXに関しては素人」と謙遜した鈴木社長に、従業員が鶏舎で実施する体重測定やワクチン接種記録、日報などをタブレットに入力し、事務所のパソコンで管理するシステムを導入し、DX化に取り組んでいる。

農場のDX化については、従業員の平均年齢が42・6歳（正社員は38・6歳）と若いことと、年間休日が106日以上と比較的多いことに加え、採卵鶏約600羽（約4棟）と育成鶏約480羽を管理していたが、最新版管理ソフトの導入時（2001年）は手書きが中心で経験と勘が重視されていたことが、DX化に取り組む直前（2019年）にはデータ化やマニュアル化が進んでいたことなどの手入力、FAXやメールのやり取りなど、旧態依然とした業務がたくさんある②日報や体重測定などは鶏群ごとにエクセルファイルを作成するため、データ容量が増加し、検索が困難③農場ごとに各種データを保存管理やデータの共有は事実上不可能④担当者の休日前の業務引き継ぎなどでお世話になっている兼松も『ファームノート』の出資者で、当時の全鶏会議担当者の尾上さんに連絡して話を聞いてもらえるようになった」など

N.G.C.の新本社屋

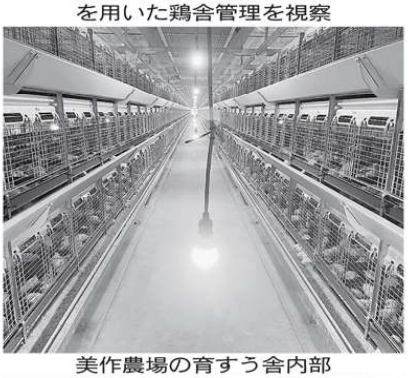
鈴木康太郎社長

本社でのプレゼンテーション

小林修氏

酒井和彦氏

美作農場ではタブレットを用いた鶏舎管理を視察


美作農場の育すう舎内部

自社開発したワクチンのスプレーヤーも見学

日何十枚もFAXが届き、ファイリングが面倒――などの問題点があったと説明。

「私が病気になったら誰が代わりの作業をするのか、常日頃不満を抱えず、ただ単に記録しているだけ⑥日報の記入は鶏舎担当者が実施するが、入力は事務員が行なう機会が多いため、問題を見過ごす⑦手書きや手入力が多く、ヒューマンエラーの頻度が高い⑧データの集計や提出書類はすべて鈴木社長が作成するため、仕事が休めない⑨毎日十時の出荷